

論文番号	3 (第10回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	自然発話における『ノダ』の語用論的性質と連鎖的機能
著者名(所属)	西住 奏子 (千葉大学)
連絡先 Eメール	nishizumi@faculty.chiba-u.jp

論文内容

1. 研究の背景および目的

日本語の自然発話において、『ノダ』は頻繁に使用されており、話し手が言いたい情報(命題)をどのように捉え、聞き手にどう伝えたいのかを示す部分であることから、話の流れや話者同士のコミュニケーションに大きな影響を与えると考える。日本語学習者にとって、その適切な使い方を習得することは、円滑なコミュニケーションのために不可欠であると考え、日本語学習の中級、上級と進んでも、なかなか難しいようである。そのような背景を踏まえ、日本語教育において、学習者が会話でより適切に『ノダ』を使えるよう指導していくためには、日本語母語話者が自然な会話の流れの中でどう使っているか、その表現の特徴を教師が把握しておく必要があるのではないかと考える(西住 2004)。

本研究では、いろいろな『ノダ』のうち、友人同士の日常会話で使用される「X の。」「X んだ。」「X んだよ。」「X んだよね。」を分析し、それぞれの語用論的性質(=話し手が命題をどのように捉えているか)と連鎖的機能(=話し手が聞き手にどのような反応を求めているか)について考える。そして、『ノダ』が会話の流れにどのような影響を与えるかを検討する。

2. 定義

『ノダ』に関する様々な先行研究(佐治 1991, Maynard 1992, Horie 1998 等)を踏まえ、発話でよく使われるノダ文の構造は、以下のような式で表せると考える。

○「命題X+の(ん)+コピュラ+終助詞」

西住(2004)で論じたように、「の(ん)」は、命題Xを話し手の主観から切り離して客体化し、その『存在』を示す機能を持つと考える。たとえば、次の例文で、命題Xを客体化するという事は、話し手の判断を含む普通の文(a)の命題を、「田中さんは東京へ行く」と名詞化することで(b)、話し手の判断を排除することを意味する。

例1(a) 田中さんは東京へ行きます。 (b) 田中さんは東京へ行く の(ん)です。

例2(a) 田中さんは東京へ行きません。 (b) 田中さんは東京へ行く の(ん)ではありません。

本研究で意味する『ノダ』とは、「命題+の/んだ/んだろう/のね/んだね/んだよね」等、いろいろな表現を含む。「の(ん)、だ、よ、よね」の性質については、本研究では以下のように定義する。

の(ん)	命題Xを話し手の主観から切り離して客体化し、その存在を示す。
だ	コピュラ部分は、「の」によって客体化された命題Xに対する話し手の態度・判断を表す。「だ」は断定を示す。
よ	「よ」の前の部分を、潜在的な聞き手との共通基盤として示す。
よね	「ね」の前の部分を、潜在的な聞き手との共通基盤として示し、そういうものとして聞き手が受け入れることを期待する。

3. データおよび考察

本研究のデータは、英国において、大学院修士課程で同じコースに在籍するふたりの男女(仮名 Y=ゆうこ, T=たかし)に、普段の会話の録音をお願いし、収集した。そこで使用される「X の。」「X んだ。」「X んだよ。」「X んだよね。」を含む発話と、その次にくる発話に注目する。(ここでは一部紹介するにとどめる。)

<データ 1>

1Y: 田中さんがね、アランの日本語っておかしいねって言ったの。 =

2T: =うん。

<データ 2>

1Y: だからね、それがなんか図書館にないかなあと思ったんだ。

2T: もう借りられちゃったら終わりだよ。

<データ 3>

1Y: 私もね、だめなんだよ、だか、だからここに来たんだよ。

2: (2秒)

3T: ん、まあね。

#### 4. 結果

本研究における会話分析の結果より、「X の。」「X んだ。」「X なんだよ。」「X なんだよね。」は、以下のような語用論的性質（語）と連鎖的機能（連）を持つと結論づける。

X の。	(語) 話し手が持っている情報を既成の存在物として次々と提示し、話の土台を固めていく。 (連) 説明を続けるため、あいづちを期待する。
X んだ。	(語) 話し手が命題を存在化してそれを断定していることを示す。 (連) 話を一段落させて、聞き手に何かしらのコメントを求める。
X なんだよ。	(語) 話し手が命題を存在化してそれを断定すると同時に、潜在的な聞き手との共通基盤として示す。 (連) 話を一段落させて、聞き手にそれと関連ある返答を期待する。
X なんだよね。	(語) 話し手が命題を存在化してそれを断定すると同時に、話し手が提示した共通基盤をそういうものとして聞き手が受け入れることを期待する。 (連) 話を一段落させて、ある程度決定的なものとして受け入れられることを期待する。

#### 5. 今後の課題

自然発話のみならず他の会話スタイルで使用される『ノダ』や、「のだろう」「のではないか」といった他の表現も検討する必要があると考える。男女による違いやイントネーションを考慮しながら、会話で使用される『ノダ』の語用論的見解から見た特徴を今後も探っていきたい。

#### 参考文献

佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房

西住奏子 (2004) 「自然発話に現れる「の」と「のだ」の違いー『命題の存在化』の概念を用いてー」  
『日本語教育連絡会議論文集』 Vol.16, pp.58-64

Horie, Kaoru (1998) 「On the Polyfunctionality of the Japanese Particle *No*: From the Perspectives of Ontology and Grammaticalization.」 *Studies in Japanese Grammaticalization-Cognitive and Discourse Perspectives-*, Toshio Ohori (ed), Tokyo: Kuroshio Publisher.

Maynard, K. Senko (1992) 「Cognitive and pragmatic messages of a syntactic choice: The case of the Japanese commentary predicate *n(o) da*.」 *Text* 12(4), pp. 563-613